エディプス・コンプレックスの
神話的・悲劇的背景

藤　井　龍　和

Ⅰ．ホメロスが語るエディプス伝説

Ⅱ．ソフォクレスが語るエディプス伝説

　——「エディプス王」物語

Ⅲ．King Oedipus の一般的論評

　——ギリシャ悲劇の人間観

Ⅳ．コロヌスのエディプス（ソフォクレス）

　1）神話的背景

　2）一般的論評，エディプスの人間性……「悩む」人格

　3）テーバイ劇 Antigone……〔神話的背景〕〔人間の法と神の法〕

Ⅴ．フロイドの Oedipus Complex Theory

Ⅵ．ユングの Electra Complex Theory

アングル画．スフィンクスの謎を解くオイディプス（1808）．
カンヴァス油彩　189×144cm　（パリ・ルーヴル美術館蔵）

I. ホメロスが語るエディプス伝説

Oedipus legend（エディプス伝説）は，ギリシャにあらわれた最初の吟遊詩人である前9世紀頃の小アジアのキオス（あるいはスミュルナ）で生まれた Homer（Homēros）の Iliad と Odyssey に見出される。その物語を，Sophocles がドラマ化して King Oedipus, Oedipus at Colonus, Antigone が出来たのであるが，Sophocles のものが一番手がこんでいる。

Homer は，Sophocles のもの程，その物語を語り尽していないが，彼の詩には，この Oedipus legend を暗示する個所が散見される。

Homer の語るところによると，Oedipus は Laius を殺し，母と結婚するのであるが，その母を Epicasta としている。Thebes の王になるくだりは同じである。そして，間もなく神が，彼の出生の秘密を明かし，王と王妃の2人は，自分らの罪（sin 道徳上の罪）を知るということになっている。そして Epicasta は，自ら首をくくって自殺するが，Oedipus は Thebes の支配統治を続ける。そして，生涯彼は，母の亡霊と罪悪観に常時なやまされ，その苛責の念にうちのめされる。そして，彼はたまたま戦争で死に，彼の葬式は，彼の名誉の中に送られるというのである。

Oedipus legend は，正に，何世紀にもわたって古代英雄伝説としてひろまり，Homer によって語りつがれた。そして発展し，最後には悲劇詩人作家の手によって改作された。こうして，Oedipus legend は，Theban Play（テーベ伝説による劇）の中核となるのであるが，このテーベにまつわる話は，Sophocles によって最も完成の形をみた。

すなわち，Oedipus と彼の家族は，カドモスの系統をひく Thebes の王家に関する伝説の中心的人物である。古代ギリシャに於ては，彼らにまつわる物語では，Trojan 戦争についての物語に対してのみ一流であるが，エディプス伝説に関しては，その Popularity は二流品であったが，詩人や劇作家にとっては，その考え方，思想の結実への源泉となった。Sophocles は，他の悲劇作家と同様，既に観衆になじみ深い神話的テーマを取扱い，独特の手法で，Theban legends（テーベ伝説）を劇化した。

先述の Homer は，吟遊詩人として各地を旅した以外にはその伝説はなく，古典時代にはすでに伝説的人物となっていた。それで，Sophocles の時代に，彼の実在性，及び彼の二大詩 Iliad と Odyssey の真の作者か否かは既に疑問になっていた。18世紀末，ヴォルフがこの疑問を解き明さんとし，「ホメロス問題」に疑問を投じ，19世紀ギリシャ文献学の一大問題となった。

心理学の分野では，Freud, S. がかくして Mythology に興味をもち，この Oedipus 伝説をもとに「Oedipus complex」なる概念を提出した。当時彼の共同研究者だった C. G. Jung，も同じ様に神話を問題とし，アガメムノンの神話からヒントを得て，この Edipus complex から「Electra complex」なるものを分離した。

私はここで，19世紀末から20世紀始めにかけて，文献学の方から popular になったこの Oedipus legend と，Freud や Jung が，この神話にあたって見たエディプス伝説を，もう一度明るみに出すことによってその神話的背景を探りたいと思う。このエディプス伝説は，異説が沢山あり，ヴォルフが「ホメロス」を問題としたと同じように困難な点があるが，諸説をもり込み，そして，Freud が言っている「Edipus complex」には，どのような神話的モデルがあったかという，ギリシャ悲劇に於ける人間性というものを考えてみ

たいと思う。すなわち，エディプス・コンプレックスの神話的背景はどのような人間が織りなす心理的な関係と状況をもつのか，というエディプス・コンプレックスの神話的モデルを探ろうとするものである。この神話的モデルによって，人間性の如何なる側面が露呈されるかが，これからの問題である。

さて，Oedipus 伝説は，Homer 以前の遠くからあり，それは，1つのテーベ伝説を形成していた。そして，ギリシャ古典期に，この同じ題材を，Aeschylus, Sophocles, Euripides が，様々に変形して劇化した。正に，ギリシャの劇作家の多くは，テーベにまつわる伝説（Theban cycles）から，劇の筋（plot）と配役（characters）を構成して，悲劇を書いた。勿論この悲劇は，ディオニソス祭礼から発展して来たものであるから，その初め，ディオニソス崇拝が異端的なものであったから，その物語の筋は，諸説ある伝説としてあったことが考えられる。三大悲劇作家のうち，一番心理分析が進んで手のこんだ手法で仕上げたのは Sophocles であった。彼は物語をこまかく，筋の通る様に仕上げた。Sopholces には，King Oedipus, Oedipus at Colonus, Autigone の3つの劇があるが，その他にまだ2つ現存している。

1. The Seven against Thebes of Aeschylus「テーバイへ向う7将」
   （Aeschylus : Hepta epi Thebes, Septem contra Thebas）
   ……Eteocles と Polynices の間の戦記物語。これは，テーベの王家（Theban royal family）の諸運命をもとにした四部劇（tetralogy）で，唯一の現存の劇である。この四部劇の他の劇は，2つの悲劇（Laius と Oedipus）とサチール劇（satyr-play, The Sphinx）がある。
2. The Poenissae of Euripides「ポイニーキアの女たち」（Euripides : Phoinissai, Phoenissae）…… 兄弟間の不和抗争を扱っている。が，これでは，この Oedipus の子供の兄弟が戦争をしている時には，Oedipus と Jocasta が共にまだ生ていることになっていて，伝説的には，またその異説改作を示す。

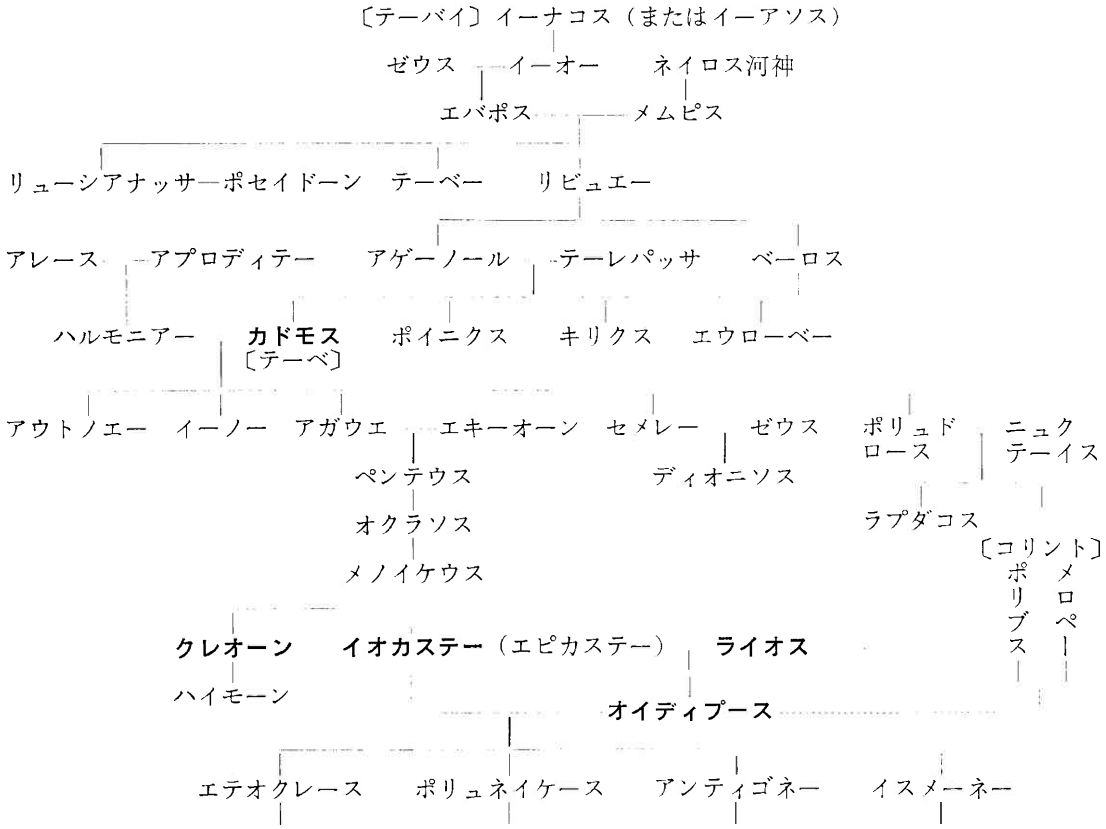
II. ソフォクレスが語るエディプス伝説 —「エディプス王」物語

Oedipus（Oidipus）はテーバイの創建者，カドモスの後裔で，その系譜は，カドモス—ポリュドーロス—ラプダコス—ライオス—オイディプースである（図1参照）。母はカドモスが播いた竜の牙から生れたスパルトイ族の一人エキーオーンの子孫メノイケウスの子クレオーンの姉妹イオカステー（ホメーロスではエピカステー）である。Oedipus をめぐる悲壮な近親相姦と血族相剋の英雄伝説は，彼を主人公とする叙事詩「オイデイポディア Oidipodeia」（現存せず）とアッティカ悲劇（Sophocles, Euripides）の創り出したものである。しかし，Sophocles が扱っているものが，通常標準的でまとまっている。

さて，ラプダコスの死後ライオスがテーベの王国を継いだが，それ以前，彼が亡命してペロプスの宮廷にあった時，彼はペロプスの子クリューシッポスに恋して彼女をさらったため呪いをうけた。これがテーバイ王家の不幸の始りである。

Troy 遠征の約60年前，このことにより，アポローンは，「ライオスに男子をもうけるべからず，生れた男子は，いつか父親殺しとなり，彼の母と結婚する様に運命づけらるべし」と，Delphi の Apollo の神託を下した。さらに，その男子は，一家の破滅の原因となろうとも言ったといわれる。しかし，Laius は，神の言葉も聞かず，妻と交わって子供が生れた。（あるいは，Laius と Jocasta の間には，子供がなかった。それで，子供を授けても

図．テーバイ王家の系譜（祖：イーナコス）



らうよう，アポロンの神託をすると，「生れた男児は，父親を殺し，母親と結婚するであろう」といわれた。そうこうするうちに，２人の間に子供が生れた。）

Laius と Jocasta は，あの警告的予言（神託 Oracle）を恐れ，この予言を避けるべく１つのプランをねつ造した。ライオスはその赤児の踵（又は足，又は脚）を鉄のピンで貫いてとめ，彼を這いまわらない様にし，ひそかに彼を自国の羊飼いに渡し，捨て児としてキタイローンの山中にさらして死なせる様に命じた。（一説には，子供を籠に入れて海に棄てさせた）

この羊飼いは，あわれみ深い男であったので，無邪気の赤児に憐憫の情を感じた。彼は山まで行ったが，Corinth の牧夫の友人に，子供の素姓を明かさないで，子供をくれてやった。彼は，この子を，Thebes から遠く離れたところへ連れて行く様に，Corinthian の牧夫に頼んだ後，彼は，王の命令通りにやりましたと Laius に報告した。

牧夫は，Corinth の王，Polybus の下僕であった。彼は家に帰ると，赤児を王の所へ連れて行き，田舎で孤児をみつけたと彼に言った（一説には，山に棄てられた後，牧人がひろうことになっている）。Polybus と彼の妻 Merope（メロペー。メドゥーサ Medusa，ペリボイアともいう）は子供がなかった。彼らは，赤児を自分の子にし，彼を，その時，子供の足（pod）が，傷で腫て（oidein）いたので，Oidipus（“Swollen-Foot” 腫れた足）と呼んで育てた（この時までにおそらく羊飼いが，ピンを抜き縄を解いた）。幸福な夫妻は，彼を息子のように愛育し，彼を Corinth の王子にしたてあげた。

彼は成人して，奪われた馬を探しに出かけて，知らずに実父ライオスに出遇ったとも

いうが，悲劇ではさらに複雑になっている。

Oedipus が青年になった時，彼は，Polybus は彼の実の父でないという漠然とした噂を聞いた（あるいは，友達と争った時，彼は偽りの子であると罵られた）。この話は彼を悩ませた。すぐ疑問になって，父母に真実を正したところ，うちあけずあいまいにした（あるいは，事実を打ち明けた）。それで，真実を神託から学ぶために Delphi に行った。彼の質問の反応に，the original prophecy（「お前はお前の父を殺し，母を妻として結婚する運命にある」）との答を得た。Oedipus は，Polybus と Merope が，彼の両親であると信じていたので，こんな予言が出ると彼らを傷つけたくなかった。彼は，彼らが生きている間は，Corinth に帰らない決心をした。

かくして彼は，ギリシャのあちこちを旅し，たまたま Thebes の近くにやって来た。テーベはその時，どうもうな怪物のスフィンクス（Sphinx）によって荒らされていた。Oedipus は，三叉路（a crossing-road）で，幾人かの従者を従えた二輪馬車に乗った一人の老人に出会った。それは，テーベから，怪物を取り除く方法を見出さんと Delphi に行く途次の Laius であった。（この邂逅の場所についても，ラピュスティオン Laphystion，ポトニアイ Potniai，ダウリス Daulis とテーバイからの道がデルポイへの道に合する所との異説がある）。

とにかく車がすれ違えないある狭い道で，車に乗ったライアスに出会った。ラーイオスの従者ポリュポンテース（またはポリュポイテース）が道をあけよと命じた。Oedipus はそれに従わず，彼の戦車の馬のなかの一頭を殺した。（あるいは，どちらもかっとなってしまって，道をあけよ，いや明けない，ということで論争から喧嘩になった）Laius は Oedipus を侮辱し，殴打した。Oedipus は防戦し，王と従者を殺してしまった。彼は，犠牲者の名前を知らずに，テーベへの道をとり続けた。

この時，スピンクスは，ピーキオン Phikion 山上に坐し，一つの声をもち，朝に四足，昼に二足，夜に三足になるものはなにか（あるいは，二人の姉妹で，一方が他方を生み，また反対に他方がいま一つの方を生むのは何か）という謎（これをムーサから教わったと伝えられる）をテーバイ人にかけ，これを解くことができなかった者を取って食った。一説によると，アンティゴネーの許婚者で，クレオーンの子のハイモーンもその犠牲になったという。

Laius の不在の間，Jocasta の弟が摂政をしていた。その間に，Laius が山中で盗賊に逢い，皆殺しにされたという報が入った。Sophocles によると，それを知らせたのはあの羊飼いで，王なき後，田舎に引きこもってしまった。摂政になった Jocasta の弟 Creon は，スフィンクスのわざわいを避けるため，その謎を解いたものは，「王国と妻のイオカステーを与えらるべし」と布告した。

一方，テーベの郊外の Phikion 山の岩の上で，Oedipus はスフィンクスに出会った。彼は，この謎は人間で，その心は赤児の時に這って歩くから四足，成人して二足，老年になって杖を加えるから三足である（他の謎の答えは，昼と夜）と解いた。スピンクスは岩山より身を投じ死んでしまった。テーバイの人々は，彼を偉大な英雄として歓呼して迎えた。Thebes の人々は，Laius が，はからずも山賊に殺されて死していたので，Oedipus を新しい王にした（この時，Creon は国を思う情が強く，王位をうばう気はなく，王にはなっていなかった）。Oedipus は Jocasta と結婚した。やがて，彼女との間に，4人の子供が出来た。男児は，エテオクレース（Eteocles）と，ポリュネイケース（Polynices）の

2人，女児はイスメーネー（Ismene）とアンティゴネー（Antigone）の2人である。古い伝えでは，これらの子が生れたのは，イオカステーの死後娶ったエウリュガネイア（あるいはエウリュアナッサ Euryanassa，ヒュペルパース Hyperphas，またはペリパース Periphas の娘）からであるとされている。こうして，original prophecy は完遂された。

Oedipus は，次代の数年の間，賢明に誠実に統治した。そして Thebes は繁栄した。しかし，突然に恐ろしい疫病が市を襲った。そして国土は荒廃した。Thebes の市民は，以前スフィンクスを退治し，テーベを救って，偉大な政治をしたエディプス王ならば，この疫病をも退治して下さることができる，といって，嘆願に王宮に集る。

彼は，Delphi に使者を派遣して Apollo の神に助言を求めた。神託によって，Laius の殺害者の復讐を遂げないで許しているいまわしい Thebes を，Appollo の神が許さず罰して疫病がはやったのだ，ということを知った。Oedipus は，この罪人を見つけ出す決心をする。私の義務は，国を守り，Laius の霊にむくいることだ，と彼はいう。そして，犯人は，その手を私にまで向けて来るであろう，とまでいう。そして市民を集めて，犯人捜査をやったが，一人も犯人らしきものは出てこない。そこで Oedipus は，予言者 Tiresias の力を借りるため，彼を召び出す。Oedipus は，この予言者は何でも知っているのだ，といってほめる。そして，疫病から市を救ってくれ，犯人をあててくれと頼む。Tiresias は何も知らないと言いはる。Oedipus は，黙っていると為にならないぞとおどす。そして，何故，おどおどしているのか，といぶかってもみる。予言者は，犯罪事件を一切知っていることは事実である。老人の予言者は，しかし何も語らない。Oedipus は，怒って彼を責め，犯人に同情しているのだろうという。Tiresias は，もう言わざるを得なくなって Oedipus 自身こそその殺害者であるという。

Oedipus は，出たら目を言ったものと思って怒る。しかし，Tiresias は，おん身こそ，この罪—すなわち，実父を殺し，母と結婚して子供までもうけたいまわしい道徳上の罪—を犯したのだと主張する。突然 Oedipus は考え込む。そして，the original prophecy に考えが及ぶが，理解出来なくて Tiresias が Creon とひそかに同盟して，彼を亡きものにしようとしているのじゃないかと邪推する。彼は叫ぶ。Tiresias は，いつわりの予言をしているのだ，お前はめくらだ，と侮辱する。そして，お前は，予言者のくせに，Sphinx の謎に答えることが出来なかった大馬鹿者だといって罵しる。そして，わしの方が目あきで，お前の方がおいぼれだ，という。

Tiresias は，この非難に対し，Oedipus こそ盲目だという。そして，将来きっと，それがわかる時があるであろうと語る。

「……おん身よ，落着き給え，おん身には，おん身の男という身分の上に，永久に残るいまわしいとがめ（科）があるのだ。」とコーラスは語る。

Oedipus は彼を退去させる。ここで，Sophocles の 'King Oedipus' では，正義と真理を愛する神 Zeus の神意を頌詩で伝える（Finat Stasimon, Lines 463—511）。

コーラス（舞踊団）の長老達は，殺害者は，下手人は誰だろうかしらという。そして，Oedipus は，正義のためにこの世に生れたのだと詠う。

「……Delphi の岩から天の声が聞える。

血を流させたもの，殺人行為をやったものの名はわからないか。

風よりも早く馬で走って下手人の下へ行け。

Zeus（Apollo）の息子よ……

その男を打つ為に駆け出せ。

彼の運命は閉じられようよ。」

Oedipus は，自分が無罪（innocent 無知）であることをつぶやく。「Tiresius が言ったことは何かの間違いだ。私は，そんなものじゃない」と。彼は，いまや，Creon を公然と非難し，彼こそ反逆者で，王位をねらっているのだと言う。Creon が，登場して，威厳をもって，Oedipus に敵対する為に，Triesias と共謀して，王位奪取をねらっているのでないことの潔白を表明する。そんな嫌疑には，何の証拠もないといって抗議する。その証拠として，自分は今だかって，王にならんとする野心を抱いたことがないし，過去にもなかった事をのべたてる。不幸にも Oedipus は余りに怒っていたので，こんな理由には耳をかさず，2人は喧嘩になった。

Jocasta が出て来て，夫と自分の兄妹の論争を終らせようとする。Creon は自分が潔白であることを誓う。Jocasta は，Oedipus に，彼を信じてくれと乞う。遂に Oedipus は気持を和げる。しかし，妻を不憫に思ってのことであって，決して Creon を信用してのことではないという。

Creon が去った後，Oedipus は，Tiresias が自分に言った奇妙な告訴を Jocasta に語る。彼女は，彼がその告訴に悩んでいる（いや侮辱された）のを見てとり，予言というものは当らないものだという。屢々間違っていることがあるといって彼に自信を取りもどさせようと努める。一例として，Jocasta は，昔の予言をのべる。それというのは，Laius は自分の息子に殺されるだろうという父親殺しの話である。しかし，Laius は，テーバイの郊外の山で盗賊に殺されたではないかと話す。そして，自分の子は，数日生きていただけで山に棄てられた後，この世から消えうせたと言う。こう話をして，彼女は予言や神託に，わずらわされる必要は少しもないと言って話をしめくくった。

この物語は，Oedipus を動揺させる。彼は，Jocasta に，どこで Laius が殺されたのかと聞くと三又路というだけでわからない。Oedipus は，三又路で，かつて一人の男を殺したことを想い出す。彼は，彼女にせき込んで尋ねた。Laius が，いつ，どんな風に殺されどれだけの従者がその時いたかともっと詳しく話してくれと言った。彼女は，彼の質問に全部答えた。そしてそれを知らせた羊飼いが，田舎にひきこもっていることまで Oedipus はつきとめた。Oedipus は，その男を呼び出す様に彼女に頼み，彼女も同意した。

Jocasta は，一寸おかしいということに感づき，Oedipus に何があるのか，打明けてくれと頼む。彼は，少し混乱していたが，自分は Corinth に生き，そこで王子として養育された次第をのべる。そのうち，彼は，Corinth の王が自分の本当の父でないことを聞かされたので，Delphi の神殿へ，真実を確かめるために行った。すると，神託が，お前は自分の父を殺し，母と結婚する運命にあると警告したのだ。実の両親だと思っていた人を傷つけるのを避ける為に，私は，Corinth に帰らないことを誓った。その後間もなく逢った人は，テーバイ近くの三又路で，数人の従率を従えた一人の老人であった。そこで喧嘩が起き，その老人と従率は Oedipus を攻撃した。それで，自己防衛の為に彼は彼らを殺した。それから自分は，テーバイへの道をとり続けた。

ここまで話した時，Oedipus は，彼が殺した老人は，もしや Laius ではないかと恐れた。そして，人間の最もあわれなものとして自分を考えた。何故なら彼は，生まれてこの方，両親らしいものといえば Corinth の王と妃であり，彼らを傷つけることを恐れて，郷里を捨てたのである。いや，私は疑がわない，自分の出生の秘密など，やはり知るよし

もない。Thebes の王など殺すものか。それより，きっと，Thebes の人々をおののかす疫病を退治してみせる。Thebes の王を殺した犯人をつきとめてみせると。こう思いつめると，彼は，その羊飼いだけが，真実を明かしてくれるように思われて，彼に希望をつなぐのであった。

Jocasta は，Oedipus が，Laius 殺しでないことをうけあう。何故なら，伝え聞く所によると，盗賊の一団が王を殺したのであるから。そして，彼女は，神託や予言を余り気にしないように彼に忠告する。

ここで重要なことは，Laius 殺しは，複数の人（一団の盗賊）によってなされたことで単数の人（唯一人の人）によって殺されたのではないということである。彼女は，そういう情報に基づいて，Oedipus の潔白をうけあったのである。そこで，Oedipus が，前王殺しだという疑いがはれる。その結果，やはり，それよりもっと犯人探しをしようと探究して，王殺害の報をもたらした老羊飼いを呼びにやるのである（Second Episode, Lines 512—862）。

コーラスが，この唯一繊細な人生の生き方を，尊敬と，謙遜の情をこめて唱う。そしてもし人が高慢の余り，自己の繁栄と成功に耽溺するならば，神はお前を殴打するであろうという。頌詩は神託を信ずべしと結論ずける。もし神託が偽ならば，人類に神聖性は残存しえないからである（Secord Stasinon, Lins 863—910）。

Jocasta が花環を持って来，祭壇に供え，Apollo の神に呼びかける。市を，荒廃せる国土を浄化して下さい。市民の恐怖を鎮めて下さい。特に，Oedipus 王の心を重くしている恐れをとり除いて下さいと。

伝令が Oedipus の下に到着する。Polybus がなくなられ，Corinthians は，あげてあなた様を新王に歓迎したいとの事ですと。Jocasta は殊の外，この潮時を喜こぶ。何故なら，このことによって，Oedipus の神託に対る懸念はまぬがれたからである。彼女は意気揚揚と叫ぶ。

「君が今在るは，聖なる徴！
　わが君は，ここずっと神託を避けて来た。
　誰が，Corinth の王を殺そうぞ。
　死――それは自然死だ！
　わが君は，神託にいう行為を避けた！」

彼女は興奮して急ぎ夫を呼びにやる。Oedipus が王宮から出て来て新しいニュースを聞く。すばらしい開放感が彼をおしつつむ。彼はうたう。

「正に，全く，我が妻よ，汝のいう通り。
　神託は無に帰した。
　私は，私の父を殺す運命にあるといわれた。
　しかし今や，わが父は墓にいませり。
　私はここに居る。
　誰が刃にかけようぞ！
　神託は成就しなかった。
　Polybus は自然死だ！」

しかし Oedipus は，この新しく発見した安全感も長く続かないことを知る。すなわち，彼の母 Merope が生きている限り，恐れ（Fear）は続くと，Jocasta に語る。Jocasta は

答える。

「恐れ？　男が何の恐れと関係があろうぞ。
　チャンスのみがわれわれの生を支配する。
　そして未来も全く知られるものかは。
　日々，最善の生き方をしましょう。
　母との結婚など，何もお前をおびやかすものではない。
　多くの人が，同じ様に夢みた結婚。
　そんなものは忘れてしまったわ。
　（あなたとの）人生が続く限り。」

さて，当の伝令は，あの牧夫で，この会話を聞いた伝令は，Oedipus に，Polybus と Merope は，お前の実の親でないから，母との結婚という prophecy の恐れなどないという。Oedipus は，呆然として説明を要求する。コリンスの伝令は語る。昔，Polybus は，Laius の御家人の羊飼いから赤児をもらわれたが，その子が Oedipus なのだ。そして，足に傷をして腫れていたから Oedipus と名づけられた。

Oedipus は，コーラスの方を向き，その伝令が話した羊飼いを知っているものはないかと尋ねる。コーラスの長老らは，先刻お呼びになったのが，正にその従僕ですという。

Jocasta は，根堀り葉堀り彼が疑うのを迷惑に思い，Oedipus にもう質問しない様にという。彼は，Jocasta の pride が傷つけられたことを悟る。何故なら，Jocasta の子供の，みじめな出生があばかれるからである。それで，Jocasta は，そんな尋問を恐れ，こばむ。Jocasta は，王宮の中へ走り込みかなきり声をあげる。

「あなたったら，全く。困ったわ。
　いけずだわ。
　こんなことになったら，もうあなたとはおしまいだわ。
　もう永久に。」

Oedipus は，彼女が，そういって入って行くのを見つめ，そしてコーラスの方へ向って言う。

「皆，話してくれ。
　どんなになってもかまわないから。
　どんなになっているのだ。
　私は，私の出生の秘密を解き明さねばならぬ。
　あいつ（妻）は，馬鹿な奴だ。
　私の出生がどんなであろうと，明らかになれば恥かしくない。
　誰かいないか。
　私がどういう人間か，知っていそうなものだ。」

Sophocles が，その悲劇で語るこの部分，すなわち，Oedipus の出生の秘密と，彼の素性がわかるとき。すなわちまた，Oedipus が，自分がどういう人間であるかを知ってほしいという気持が現われる時，すなわち，Oedipus は，こういう人で，このように成長なさったのだという Oedipus 自身への関心を示してほしいという念願が現われるときのこの場面が，一番 'King Oedipus' のクライマックスとなっている。そして，この場景に於て，われわれは，Laius と同じく，Oedipus も，共に神託の恐ろしい運命を避けんものとして努力（Strebung）したことに思い当るのである。しかし，個人的な運命（Individuation）

は，その努力を裏切る。そして，Jocasta が神を尊敬する意志を表わし，もう，死にたくなっている。人生のややこしさに傷悴しているということに注意すべきである。

Corinth から伝令が到着し，よいニュースをもたらす，全く，人間は自己拘束の原理によって，自分の内からしか観ることができないもので，正にめでたしめでたしで終るところである。しかし，現実は，ドラマをクライマックスへ持って行く。Oedipus は，恐ろしい神託をのがれたことを，Polybus の死で知る。しかし，また，Polybus が，本当の父でないなら，Merope も本当の母でない筈である。今や，Oedipus は，自己同一性(identity)を発見しようと決心する。

Jocasta は，Oedipus の出生の秘密をそれ以上追求しない様に懇願する。彼女は，2人の自己実現（Self-actualization）へ向けて進む方向に於て，Oedipus を救おうとする。

合唱隊が，陽気な Cithaeron 山の賛歌を歌う。その山で，Oedipus は発見されたのである。主神と女神が，彼の本当の両親は誰であろうかと歌う（Third Stasimon, Lines 1083—1112)。

羊飼いが遂に到着する。コリンスの使者は，すぐに自分の旧い友人であることがわかるが，羊飼いは，神秘に包まれたあの子供の事を尋ねられて，不承不承に答える。Oedipus は，お前の力になろうという。それで，羊飼いは，前王もいないので，その物語を話す。そして，余りの憐れさに，前王の命令にそむいて，その子供を助けたことを自白する。遂に，コリンスの使者が述べた子というのは，Laius と Jocasta の男児（息子）であったことが判明する。

遂に Oedipus は真実を知る。そして，予言（神託）が，もう実は完遂されていたことを知る。彼は，自分が犯した諸々の罪の大きさに卒倒しそうになって，取り乱して王宮の中へ駆け込む。

「アア。どうしたというのだ。
　全て知っていたのに。もはやおそい。
　何故，わからなかったのだろう。
　もはや，かくすことが出来ない。
　穴があったら入りたい。
　オオ光よ，神よ。私はもはやあなたにお逢いしたくありません。
　私の存在が，わかった。そして，何といまわしいのだ。
　（父を殺し，母と結ばれた）
　私は嘆きたい。
　私の出生は何といまわしく，
　私の結婚も何といまわしいのだろう。
　私の血は，そのいまわしさで，汚れている。」

彼の悲劇をもたらしたのは，慈悲ある羊飼いの憐憫の情から出た行為に発端している。更に，彼を悲劇に導いたのは，スフィンクスを討ち，善政をしたテーベの英雄，テーベの王としてのプライドである。そして，その蔭には，人(Laius) を殺している。やはり，うしろめいたものは，立身出世しても，心は孤独である。こうして，Oedipus は，父を殺し，母と結婚したことを知っておののく。（Fourth Episode, Lines 1113—1185)。

コーラスは，人生の浮沈と悲しみを，その悲劇的運命を，荘厳に歌いあげる。Oedipus のように，この世で最高の人さえ，究極的には，かかる人生の悲しみ，悲劇的運命がある

のだと。

「有限なる人間は全て死へと向うのだ。
いつまでも生きてはおれない人間は，
無へと加算しようとする。
人の幸福は，徒花（あだばな。咲いても実を結ばぬむだな花。はかなく散りゆく花），
この浮し世では幻影（illusion）に過ぎない。
虚飾にとりつかれた例がここにある。
それが Oedipus だ。
人は，仮りの世に生きるのみ。
不死鳥こそ幸福なり。」

召使いが出て来て，コーラスの長老に告げる。「只今，恐ろしいことが起りました」と。彼は，Jocasta が，建物の中をヒステリカルにころげまわり，自分の運命を嘆いておられると。それから自分の部屋にかぎをかけて閉じこもってしまわれたと。召使いらは，どうしたらいいかしらと目を見合わせていた。と，そこへ，Oedipus が手に剣をもって，彼女の後を追いかけながら暴れまわって出て来た。彼は，ドアを叩きこわした。すると発見したことには，彼女は首をくくって自殺していた。これを見て，Oedipus の大暴れはおさまったように見えた。彼は彼女の身体をかき抱き，優しく床に下した。突然彼は，彼女のドレスの金のブローチをひきちぎり，それで，自分の両眼をひき裂いた。血が顔に流れしたたるままにまかせながら，彼は叫んだ。

「もはやこれで，私は，
自分の恥を見ることがない。」

自分の血で顔をおおい，明らかに強烈な苦しみに悩みながら，盲目になった Oedipus が王宮からころがり出る時，コーラスはあわれな歌を歌う。彼は，自分の道徳的な罪を嘆く。そして，自分は，子供の侭死んだらよかったと苦しそうに叫びをあげる。1つの罪から，又別の罪をひき起した悲劇的な事件の連鎖を回顧してすすりなく。

「全ての人間のいやらしさと恥かしさを，この罪に於て見る。
何と言葉ではいえない汚れた行為よ。
私を直ちに暖かく包んでおくれ。
かくしておくれ。ああ神よ。
私をどこえでも，かくしてしまっておくれ。
遠くへ。
殺してくれ。
海の深みへ投げこんでくれ。」

ここに於て，父親の権威に対する子供の反発と父親殺しの意図，母親殺しの意図とそれを暗示する近親相姦の psycho-sexual な想念が，シンボリックに表明されている。しかし，近親相姦と相剋の気持はあっても，親のふところの中で子供は成長しなければならないという根本的掟から，父親殺しの意図は，自己の独立自尊の方向をたどる。又，母へのエロティックな気持をもつことへの禁止心情は，他人への愛情（特に妻への）に変わるものである。ここでは，Freud のいう Edipus complex と親子間の心情的相剋を，子供の侭でいたかった，という Oedipus の発言で解釈している。

そこへ，Creon が入って来る。Oedipus は，彼に対する自分の間違った取扱いを悪かっ

たとわびる。Creon は慈悲深い男であったので彼を慰さめ，Jocasta を丁重に葬ってやることを彼に約束する。

Creon は，Oedipus の若い娘らの Antigone と Ismene を呼びにやる。娘達は泣きながら父の傍へ行く。Oedipus は，優しく頭をなぜ，幸福に生を送ってくれよ，というが，いまわしい道徳上の罪（尊族殺人と近親相姦の罪）によって，おそろしい汚点がついているので，思いわずらう。彼は，Creon に彼女らの面倒を見ることを約束させる。そして，娘達に語る。

「わが子よ。お前達が理解しなければならない事が多すぎる。しかし，これらも，お前達が，大きくなったらわかるだろうよ。今，お前達が，これらの事に耐ええないのは当り前だが，お前達には祈りが残されている。お前達がお祈りをしさえすれば，この難事も解けてくる。

平和に幸福に生きられる様に，お祈りしなさい。

この事より他に手だてはない。

そうだよ，本当にそうだよ。

お前のお父さんより，ずっとよい幸わせな生活を送っておくれ。」

Oedipus は，Creon に，自分を追放してくれと懇願するが，Creon は，Apollo の神が裁断を下し給うまで待とうという。Creon は，彼に，王宮で休むようにいう。Oedipus は娘らをかき抱く。コーラスが詠唱する。

「テーバイの息子達よ，娘達よ，見よ。

これが Oedipus だったのだ。

人間の中で最高に偉大なる人物。

彼は，深遠なる神秘に対する鍵をもっていた。

人もうらやむ繁栄と隆盛。

見よ，不運な潮が彼の頭を洗おうとしている。

不死ならぬ人間は，今，その終末を見なければならぬ。

そしてそれが教訓になろう。

時の流れが知らせるまでは，誰も幸福かどうかわからない。

彼の幸福は，墓場の中にもちこされた。

幸あれかし。」

(King Oedipus, Exodos, Lines 1223—1530)

III. King Oedipus の一般的論評 —ギリシア悲劇の人間観

King Oedipus は，大抵の批評家によって，Sophocles の大作，全ギリシャ悲劇の最優秀作品とみられている。Sophocles の創作技能は，一貫して流れる興奮の山を維持しているなめらかな欠点のないアクション，配役と哲学的心理学的内容の賢明なバランスのとり方に明らかに表われている。個々のエピソードは，論理的にうまくつながっており，物語の中で起る出来事は，皆明瞭に知的に動機づけられている。Oedipus のパーソナリティの弱点に光をあてること，劇の悲劇的な結末を予示することなど，明らかな irony を使って示すこともおこたっていない。第二に配役には明確な個性がある。彼らは，非常に大らかに現実的に描かれているので，現実の人間性（authentic humanity 真実の本物の人間性）の感覚をもりあげている。

Creon は正直さ（honesty），合理性（rationality），冷静さ（calmness），慈悲深さ（benevolence）は，Oedipus の性急さ（rashness）と対照的である。この Oedipus の性急さが，父親殺しをやっても，彼は無知（innocent）でやっているのだ。Jocasta は，伝統的な貞淑な（virtuous）な愛妻として描かれている。そこに１つの Oedipus との対照に於て，ドラマティックなインタレストを与えている。しかし，注意すべきは，Oedipus に対して彼女の母性的態度（maternality）がみられることである。２人の羊飼いと牧夫は，微妙に違う実直さ（faithfal）と憐憫の情（mercifullness），同情（pity）といったパーソナリティに描かれている。そして，この悲劇に関る接点に於て，人間性にもとる感情を示してあますところがない。

全体的にこの悲劇は，Oedipus の強力な性格（figure）が優勢である。彼は気性が激しく（impetuous），高慢（proud）である。しかし，かかる欠点（faults）にも拘らず，基本的には善人（good man）である。……人間誰しも欠点があるものであり，逆説的に言えば，人間だからこそ間違いも起す，という説が成立する。文脈に於て，彼は罰に価する悪人だとは思えない。

しかし，Sophocles の宗教的思想には，彼の行為に対する責任性（responsibility for his acts）をあげている。彼の original な motives（人を傷つけるな）とは無関係に，又，彼の人生を支配している諸力を自己統制したり理解したりする能力，換言すれば，世界はどのように出来ているのかといった世界観と，自分の欲望をどのように処理したらいいのかという人生観の形成の乏しさとは無関係に，目には目を，歯には歯を，自業自得という，その行為に対する賞罰があるのであるとする。「他人を傷つけるなかれ，自己を愛して，自己の無知を知れ」といっているかのようである。この素朴なしかし，勇気のいる道義的行為の中に，人間が，自分より愛しいものはないことを知って，その自分の無知なることを知っての無力性自覚による世界甘受（acceptance）による自立によってこそ，英雄的姿に達する。ここに，人間が，真実の高貴性に達する唯一不二の機会が，横たわっているのである。原始仏教では，自己を愛することを教えている。「思いによってすべての方向に趣いても，自分よりも更に愛しいものに達することはない。そのように他の人々にとっても自分がとても愛しい。それ故に，自己を愛する人は他人を傷つけるなかれ」と中村元は原始仏教に於ける真実の自己の開示法を教えている（中央公論，1973・4，pp. 331）。この真実の自己に至るには，自己の探究をして，諸々の疑惑を解き放たねばならない。このことこそ，彼が，彼の人生に価値を保存するに至るところの事柄なのである。

Sophocles は，宇宙を支配するに何か調和的目的があると信じていた。不死ならぬ死すべき人間はそれを理解することは出来ないけれども，この理解を越えて，宇宙を支配する予定調和という力が存在すると考えていた。しかし，この支配力は，人間の努力（striving, Strebung）を越えている。神託を避けようとしてとった Laius も，Oedipus の行為も，やはり，神の予定や裁決の前にはむなしい。どんなに走っても，やはり，お釈迦さんの手のひらの上の孫悟空なのだ。だから，人間は努力と誠実あるべしのみであり，神に帰依しなければならない存在なのだ。Sophocles は，この宇宙的支配秩序（a cosmic order）を劇化で現前させた（visualize）。

ヘシオドスやホメロスは，かくして，人間として，あるべき姿をうたう。

ホメロスは努力（streben）についてうたう。人間である限り，英雄にしても，神意を十分に知ることができない。しかし，英雄は，運命的厭世的になることがない所に於て英雄

である。彼らは，自分の能力の限りを尽して，倒れ，あるいは敗れる。ただ彼らの努力は自己に課せられた義務，使命を飽く迄尽すことに向けられる。それは，自主的に決意し(自主性)，自己に忠実になろうとする努力だ。それは，神意にかかわりなく，人間としての存在の主張である。だから，たとえ事は成らず敗者となっても，この努力，この自己主張（selfassertive）によって，高貴な人間となる。愛情にしろ憎悪にしろ，その純粋なものは，もとより人間の美しさであるが，それにこの自主的な義務感が伴ってこそ，人間の美しさは一層高められる。このような行為や感情を，知性が制御している場合は一層尊い。どの勇士も，武力や腕力だけの持ち主ではなく，知性がその行動を制御し，感情さえも制御するならば，克己（self-regulation），克服（conquest）によって高貴になる。努力するものには人間の価値が与えられる。ホメロスは，このように，人間の，あるべき人間としての人間性を讃歌した（村田数之亮「ギリシャ」 pp. 103—104, 108)。

ヘシオドスは，ホメロスよりも，より現実の人間として，進んだギリシャ人をとらえ，倫理と道徳の分野に深い感化を与えた。「労働は恥ではない，怠惰こそ恥だ」(「仕事と日々」) と彼は，貧しい人びとも，働けば道が開かれ（運命が開け），善と富とが得られる（向上の道が開ける）ことをうたっている。また彼は，神の最後の正義を信じて疑わず，「正義に耳を傾け，横暴をやしなうな。横暴は貧しいものには悪である。……それよりは，正義に通じるほかの道が望ましい。」(「神統記」) と，神，殊にゼウスの神は，最後には正義をあらわすことを繰り返しうたう。「善への道は長くけわしく。はじめはきびしいが，ひとたび頂上に至れば，つらくとも，その後はやさしい」（「仕事と日々」）と，神を信じて日々の苦しみに耐えてきた人間にしてのその喜びを説き得る倫理を書いている。Sophocles も，かようなオリンポスの信仰を，そのギリシャ神話の典拠になった彼らの著から学んだのである。彼は，人間的な努力の領域を余すところなく表現し，人間としての限界線を通る努力をしている人のすべての心を打つものがある。

Sophocles が教示しているこの人間界の秩序というものは，ギリシャの作家イオーンが教示している「汝自身を知れ」に相通ずるものがある。Oedipus の様な英雄でも，自分は何でも知っている積りでいながら，実は徳や善については何も知らないのである。その無知を転じ，Oedipus は眼をくり抜くのであるが，それによって，つまり無知を自覚することによってより高次の真理が求められることを暗示している。このような無知を知るという行為は，その時，人間が高慢であるからそのプライドの為には1つの侮辱にさえなる。正に，以前までの自己を諦めなければならないからこれは耐えられない問題である。しかし，人間はこの諦観を越えるところに真理が現前するのである。そのように人間は自己を探究し，自己を深く知らなければならない。しかし，この状況を甘受（acceptance）することは，ペシミズム（厭世）とか，単なるあきらめ（諦観）ではない。そこで，人間が見ることが出来る最高の人生の意味（meaning of life）を見ようとしているのである。「ソクラテースのように，自分の叡智が実は何物にも値しない，ということを知っている人間は，実は最も賢明なのだ」と神託で告げられているのである。正にこの「汝自身を知れ」ということばがデルフォイのアポロン神殿に刻まれていた。神を恐れぬ驕慢は，人間として最もわるいことだった。敬虔こそが，人間生活の基本であるべきだ。哲学者ターレスはこれを「度を過すなかれ」と言い換えた。アテネの政治家で詩人のソロンは，「何事にも極端をつつしめ」といって，中庸とか中道が人間の徳として大切であることを述べた。正に，人間は無知なるが故に，驕慢になるべきではなく，敬虔に中道を守り，自分の欲望を

自制しなければならないことを説いたのである。Sophocles の観点に立てば，人間は自由意志（free will）を持っているが，その人間の活動は，こうしておのずから限界があるというのである。余りに驕慢にこの自由意志を発揮すると，環境のネット・ワークに終結的にがんじがらめになってしまうというのだ。この環境（circumstances 因縁）というのは，屢々運命（fate）によって決定されているように見える。それは遺伝と環境が決定する問題であるのであり，幼児期の心的外傷（infantile trauma）や出会い（chance）によって決定されるようである。これが神の測り知れない意志となる。しかし，人間が究極的には自分自身の行為（deeds）を選ぶのであり，それらの運命の終局的な責任を負わなければならない。個々の選択（choice）は，それに随伴するものを予定するが，因縁の鎖（chain of circumstances）は，多くの点で打破する事が可能である。こうして打破すれば，新しい方向が人間に現前するであろう。King Oedipus に於ける数々の事件は，この宇宙的な秩序の内で，全ての事柄の関係の下に横たわるものを例証せんとして発想創出されている。人生（life）は屢々，この関係上，屢々，惨酷なもの（cruel）であるが，こうして，Sophocles の確信は，混沌としたもの（chaotic）じゃないということである。

こうして，Oedipus のような純真な動機を持ってしては，自分の運命を解明するに十分でない。——彼は神託の意味を，もっと十分に熟考すべきであった。もっと注意深かったならば，コリンスにいる間に自分の出生の謎が解けたであろう。そして，コリンスにもっと止っていたならば，もっと賢明になれたであろう。また，テーバイの王になる前に，もっと調査していたなら，前王の不慮の死が何であるかも解ったであろう。最後の瞬間に於ても，犯人（自分であるが）を探す熱心さが少ない。

最後の分析に於ては，Oedipus は，有罪（guilty）であったが，彼の本当の罪（real sin）は，彼の父を殺してもいないし，彼の母と結婚もしていないのである。これこそ重大な無罪（serious crime＝innocent）だと言わねばならぬ。これこそ，彼が成人した暁に自からにこの罪に答えるべき，また，彼の人生行路の問題として答えるべき問題である。Oedipus の予定的野心というのは，アポロの神託によって明らかな神聖な意志（divine will）をまげることによって（try to circumvent），神の水準まで自己を止揚すること（raise himself to the level of the gods）であった。しかし，人間は神の前には，その人間性たる愛憎や疑惑から逃れることは出来なかったのである。

こうした事柄の仕組みの中で，Sophocles は，人間的な幸福への道（方途）というものは，神への尊敬と人間の謙譲でなければならないことを教えたのである。人間の存在の目的は，神のしくみ給うた限界内に於て，最高の可能なる個々人としての発達を達成することであった。又，神聖なる神の掟を理解しようとすることであり，その掟に則って帰依することであったといえよう。又，人間の条件の限界点を優美に甘受することであったといえよう。又，勇敢に人間的な重荷を背負って，忍耐と寛容をもって，あらゆる人間的な行為に完全なる責任をとるということであった，といえよう。

Sophocles の Oedipus 伝説はまだ続く，それを次に見よう。

IV. コロヌスのエディプス（ソフォクレス）

1） 神話的背景

Oedipus は流刑になろうとしたが，摂政をしていた Jocasta の兄妹の Creon は，神託が教示する迄，テーバイにとどまる様に説得した。Oedipus は，何年も市に止まり，遂に

追放された。もう老人になってしまい，盲目でよるべない Oedipus は，あてどなくただ彼の一人の忠実な末娘 Antigone を伴って，ギリシア中をさまよった。彼が罪を持っているというニュース及び，彼にあびせかけられたのろいの言葉が国中に広まった。そして，Oedipus は，逢う人毎にしりぞけられた。

遂に Oedipus は，アテネの近くの Colonus までやって来た。そこには，好意ある神ユーメニデス（the Eumemides）の聖なる神殿があった。土地の住人は，彼がどんな人間であるかを聞いて恐れた，が，アテネの王の Theseus は，彼にその聖域に入ることを許した。そうこうするうち，又別の prophecy（予言）が現われた。それは，Oedipus の墓を持った市は，good fortune が続くだろうというのである。テーバイから Oedipus を追い出した Creon は，今度は，彼をむりやり連れもどそうとしたが，アテナイの市民は彼を守った。Oedipus は平和に，Colonus で死んだ。葬式も，死の正確な場所も，Theseus を除いて，全ての人からかくされた。

Oedipus の死の寸前に，Eteocles と Polynices が年令に達し，テーバイの共同統治者になった。しかし，お互いに独裁をねらって争った。Eteocles が人々の賛意を獲得し，Polynices は命だけ助けられて市から追放された。Eteocles は単独支配をし，一方，Polynices は Argos へ行った。そこで勢を得た Polynices は旗上げをし，王位をねらった。大戦争が，テーバイの市外でおき，テーバイ軍が勝った。二人の兄弟はお互いに死に，Creon が王になった。

2）一般的論評，エディプスの人間性 —「悩む」人格

Oedipus at Colonus は Sophocles によって書かれた最後の劇であった。それは，彼の他の作品と基本的に異っている。それは，他のものよりも，プロットがよりゆったりと構成されているからであり，英雄が中心的登場人物となって，他は単に連続した場景がつながっているだけであるからである。そして，他の配役は従属的なもので，比較的重要でない。そして，Sophocles によって作成された最も美しい哀情詩がいくつかこの劇中に組み込まれている。この点に関して，多くの批評家は，これを彼の詩的発展の最高点を示すと記述している。例えば，それは第一エピソードの最後の哀情詩である。Oedipus は，アテナイの長老とテセウスに語る。

「私は今迄耐えて来た。
　最もいまわしい不義不正を。
　全く人間に価しない悪だ。
　神のみぞ知る。
　私が私の意志で何で自らそれを選ぼうぞ。」

こういって，Oedipus は，人生と地上的な物の変化性・無常（instability of life and earthly things）を述べる。

「時が，瞬間が，私の友人である。
　時が，何処たりとも荒廃流転せしめてしまう。
　しかして，その時を征服することが出来ない。
　神のみが年をくわない，死もない，永遠の生を持っている。
　他のものは全て滅びなければならぬ。
　人の気持も，人から人へと絶えず変わる。
　町の精神にしても，市毎に変わる。

市は，遅かれ早かれ，互いに変わろう。
喜びは悲しみに変わり，その悲しみも亦喜びに変わろう。
今，あなたと，テーバイの間の空は晴れている。
しかし時は，何回も何回も，夜と昼とを持ち，めぐらせる。
時が，数えることができない行程をめぐる。
陽が少しあがれば，剣のきっ先が，その日の調和を破るだろう。
……ありえないことではない。
Zeus が Zeus でなくなり，Apollo が本当の Apollo でない時が，いつかは来よう。」

Oedipus は，年老いて悩みに苦しんでいるけれども，第一場（King Oedipus）に現われたのと同一人物である。彼の性格は，やはり自尊心があり（proud），感情が激しく性急で（impetuous），短気で怒りっぽい（hot-tempered）が，しかし，Sophocles の哲学的な見方は下記のようになり，その点では変ってくる。即ち，彼の人生行路としては，他に何も選択するものがないから，自分の罰（punishment）を受け入れる。しかし，自分の個人的な無罪(personal innocence）を主張し，彼の罪（crime）を，運命の責任に帰する。彼は，ただ，その運命の掌中にあって，helpless な役割しか果たさなくなっている。

Oedipus の死にまつわる不思議な一風変った状況を通じて，Sophoclesは，Oedipus を，基本的には善人なのだけれども，その無知（ignorance）によって起こした罪(sin）によって悩む moral dilemma を解明しようと試みている。Sophocles に従えば，Oedipus は，とにかく，その悩み（suffering）を通じて純化され（purified and uplifted），精神的向上があったという。彼の死の瞬間に於て，Oedipus の生涯と記憶は，不思議にも浄化され，彼の埋葬された場所は，一種不思議な魔力（magical potency）をもった一つの神聖な廓となったのである。そして中世のキリスト教的な劇に於ては，彼は聖徒の列に加えられるという筋になっている（R. J. Milch)。Oedipus の死去を描写する神秘的な場景は，彼を英雄的な姿に仕立て上げている。そして悩みをもち，それを悩むといういかにも人間的な姿でありながら，神格的な威厳をもたしめている。恐らくそれは，Oedipus が，友人も持たない，他人には一種理解出来ない世界に生きていたからであろう。Oedipus の精神的高揚は彼が退位して，道徳的な罪をもつという彼の凋落と同様に，期待され得ないようなものであった。そして，そこに，彼を越えて支配する宇宙の力を暗示せしめている。正に，人間的な事柄を越えて働いている外的な諸力の存在を例証せしめている。しかし，その中に人間が達成しうる人間的なものとして描き出されているのである。ゲーテは，ファウストの中で，悩みを持った思索的人間という又，別の面から即ち，努力しようとするが，なかなか理想に到達出来ないでいる人間を次のように言っている。

「人間は努力する限り悩むものだ。人間の活動は，とかく無気力に萎え勝だ。人間はすぐ，無条件な休息を求めてしまう。
Er irrt der Mensch, so lang er strebt. Des Menschen Tätigkeit kann allzuleicht erschlaffen. Er liebt sich bald die unbedingte Ruhe. aus Goethes Faust.」

そのような人間性であってみれば，Oedipus の場合は，正に英雄的な行為—善政と良い家庭をもったこと—をやったのである。どんなに悩んでも，努力する時，やろうと決心する時には，しゃんとすること，これこそが人間の偉大さであろう。そして，Oedipus at Colonus は，その人間的な努力の稔りであるアテナイの人々の民主制度や立派な伝統，あるいはアテナイの国土の自然美に愛すべき誇らしい賛辞を送っている。悩む人間こそ偉大な

のである。「長き夜を泣き明かしたものにあらざれば，人生を語るにあたらず」なのである。そして，「人生の苦悩の大部分は，その根本が人間性の中にあって，人間の制度の中にあるのではない。（ローウエル）」，Colonus に対する有名な頌詩（first stasimon）と，Theseus という国民的英雄の性格描写は，この結果である。Sophocles の最後の劇作としてのこの劇は，晩年の詩人が，死の意味について，高貴な個人的なヴィジョンをあらわすものであった。劇は，こうして，和解と同情とで高揚された調子で終る。

3） テーバイ劇，Antigone

Sophocles は，先の King Oedipus，それにこの Oedipus at Colonus と，更に Antigone を加えて，テーバイ劇の三部作たらしめている。全て，テーバイを舞台とするもので，更に，Oedipusに も関係があるので，この Antigone にも触れておこう。

〔神話的背景〕

Creon の最初の公事としてこの新支配者は，テーバイの英雄的防禦者 Eteocles には，市立の墓地を与えらるべきであるが，テーバイを攻撃した反逆者たる Polynices は，葬式もしてはならないと宣言した。これは恐ろしい罰であった。何故なら，少なくとも葬式をしなければ死者の魂は，後世も浮ばれないからである。

テーバイ人の多くは，クレオーンの布告に驚いた。しかし，誰も反対する勇気はなかった。アンチゴーネだけが，王に反抗し，弟のポリュネイケースを埋葬した。クレオーンはこれを知ると，彼は，アンチゴーネを死刑にすると言った。クレオーンの息子の Haemon は，アンチゴーネと婚約仲であったので，父を不憫に思わしめようとして，父がまだ死刑にしないで，彼女を洞窟の牢に入れている間に，彼女と一緒に死を選んだ。クレオーンの妻は，息子の死で断腸の思いをし，自殺した。Antigone の死でもって，Oedipus 家は断絶した。何故なら，Ismene の噂を聞いたものはなかったからである。

〔人間の法と神の法〕

「Antigone」に於て，Sophocles は，人間の法と神の法との要求間の，所謂おなじみの conflict を検証している。

この宇宙的な問題は，Polynices の埋葬に関する論争に於て結晶化されている。ここに於て対立しているのは，Creon の公の福祉の理解の仕方と，Antigone の宗教的な義務についての考え方である。

この劇の主役は Creon である。彼は誠実な（sincere），愛国的な（patriotic），私心ない（selfless）動機から行為をする人物に描かれ，それでもって明瞭な悲劇的人物になっている。そして，その故に，余りに柔軟性を欠き（inflexible），見通しに狭量で（narrow），批判に注意し（heed criticism），誤りを認めること（admit error）ができず，気がついた時には遅きに過ぎている。

劇の終りで Creon は自分の非を認め，その非を受け入れるが，彼の行為の結果はもはや変えることが出来ず，2人は死んでしまう。Creon の悲劇は，自分以外の他の人が正しいということを認めることが出来ないのであり，国の法よりも，より高い法（宗教的意義たる葬式埋葬）を認めることができなかったという失敗にある。部分的ではあるが Creon の性格描写は，善人の上に支配する絶対権力の不正なる影響についての Sophocles の批評であり，典型的な民主的アテネ人の態度を描き出さんとするものである。ここに於てはポリスのためよりも，「人民の，人民による，人民のための政治 Of the people, by the people, for the people」ということがあてはまる。

Antigone の役割は小さいけれども，Antigone の性格は，それだけ理解するにわかりにくい性格になっている。話は，Polynices が，まだ Oedipus が Colonus で生きている時，Oedipus に味方して，テーバイで正当な場所を得て暮らすべきだとした時から始まる。そして神託が，Oedipus の援護者は戦いに勝つ，と予言したことをもって，Polynices は自分の無力性を露呈して，自分らの Argos での旗上げを支援してくれるようにいうのだが，Oedipus はことわり，Polynices の過去の自分に対する誤った取扱い（実は，そう言いながら放置した）を公然と非難し責める。Oedipus，Polynices が，決してテーバイを自分の手に入れることができないで，戦野で報いを受けるだろうと予言する。

Antigone は，自分の弟に忠告し，軍隊を引っ込めて，テーバイ軍の侵略をそらせることによって，自分を守れという。が，Polynices は，もう遅すぎると答える。彼は，自分の部下のリーダーを残すために，戦争を遂行し続けねばならない。そして，自分は追放の身としての恥にもはや耐えることができないからだ。彼の軍人達は，もう落胆してしまうだろうから，Oedipus が自分を支援することを拒んだことを，軍人達には言いたくないと言う。最後の要求として，Polynices は，Antigone に，もし予言が本当になったら，そして自分が戦闘で殺されたら，ささやかに自分を葬ってくれと頼む。Antigone は，彼の願望を悲しく受諾する。兄妹は，これを最後に別れ別れになる（Oedipus at Colonus, Fourth Episode, Lines 1251—1555）。

Antigone の気持は，このような兄妹愛のとりきめを基本に展開され，同じ人間であるなら，反逆者であろうと，死者の葬いはなさるべきであるという宗教的儀礼観から出ている。しかし，ある批評家は，彼女はプライドが高すぎて，王のクレオーンを何とも思わない態度は，道義上良くない，と思うかも知れない。又，わざと殉教振っていて，未成熟なマゾヒステックな願望があって良くないと思うかも知れない。又他の人は，しかし，内的な気の強さがある高貴性と，思ったことはどしどし敢行する実践的な婦人と評価するかも知れない。最後の観方に立てば，残酷な，無価値な罪で苦しんでいる人に味方する人であり，このような人を見る時には，彼女は，真実を曇らせないだけの知性と意志があるのである。いずれにしても，彼女は，女性としての母性的本能的な意志及び情緒からかり立てられていて，世話好きなのである。

一方 Creon は，喧嘩両成敗ということは考えなかったが，事態の冷静な分析に基づいて，王の原則（どちらかが正しく，他は国賊）に基づいて行動したが，Antigone を罰したことの非を認め，後から追いかけて，Antigone を許そうとするが，時すでに遅く，自分の息子まで自殺してしまう破目に陥るのである。ここでは，男性的な理の感情（男性的性格）に対し，女性的な情（女性的性格）が勝ったといえよう。Creon は，この理の強きのあまり，悲劇的人物となるのである。

Antigone と Creon の立場は，このように対照的であるが，両者共，自分自身の正しさに於ける同じ様に頑固な信念を所有している。しかし，ある程度両者とも，このように性向が違うのであるが，神に対する人間性のあり方という点に於て，この悲劇的結末に対して責任を持っているといえよう。

この劇には，多くの優れた minor character が出て来る。Creon と Haemon は親子であれ，政治に対する見解は異なり，Haemon は，正しいことは正しいとして別行動をとる。このような会話の，心理学的な真実性（psychological anthenticity）は屢々誇められてよい。choral odes と Antigone の嘆きの詩は，もう最高の詩的芸術とされている。そ

して，それは，伝統的ギリシアの宗教思想のこの表現（オリンポスの信仰）と，ある旧約聖書の讃美歌の思想との間には，何か類似性があるともいわれている。最後に，このAntigone の嘆きの詩をみてみよう。

「あなた（Creon）はあなたの道を歩きなさる。
私は兄を埋葬する。
もし，そのために死んでも幸福だわ。
神への尊崇を確信しているわ。
私はそれで満足だわ。
あなたが生きていたいと仰っしゃるなら生きていらして下さい。
天の神聖な法を査定したいと言われるのなら，そうして下さい。」
（Antigone, Prologue, Line 1—99）

そうして，First Stasimon（Lines 332—383）の chorus は，人類の多くの達成を美しく歌いあげる。しかし，究極的には，人類は全て，死に出会わなければならないという憂いを含んだ詩で終る。この詩は，Sophocles によって書かれた最も立派な，最も有名な敍情詩の一つである。

「この地上には驚くべきことが多い。
この中で最大のことは，人間が存在するということである。
人間は大洋を渡り，谷を越えて行く。
風は谷をわたり，海は輝く。
波はうねり，うつつにも，遠くまでさざ波をうっていく……。
しかし，有るものは人間の力だ。
人間の繊細さが，あらゆる機会（チャンス，一期一会，一回切りの出会い）を適わしく相会させる。全ての危険をも征服する。あらゆる病（やまひ）に対して，その救済薬まで持っている。
そして，死さえも救わんかな。」

V. フロイドの Oedipus Complex Theory

Freud に従えば，phallic phase（男根期3～7才）に達した子供は，その両親との関係に於て，特殊な性愛的心理様態を形成する。この特殊な幼児期のパターンは次の様なものである。

男児は，第一次性愛対象として母を求め，その解剖学的な性の相違を3才頃から発見して好奇心をもつ。そして，母への承認の要求（need of approval）から，養護者としての優しい母の愛情を獲得しようとする。その時，邪魔なのは父の存在である。当然彼は父と競争したり張り合う。又，父は尊大であるので，父が性的に去勢化（castration）でおどしていると想像し，父をやっつけようとする願望を形成する。一般に男児は，その願望は，ある時は父親殺しにまで発展するのであるが，大抵，仲間集団への参加と，就学期の到来によって，潜在期（5～12才）に達し，再びその性的発動の告知（renouncing some of his sexual desire, 11—12才）によって，自分の父と自分を同一視することによってOedipus Complex の解消へ向う。

女児は，同様な過程をとって，男子よりも早く父を想い母をライバルとして取り扱い，父の方に慰めを求める（entertains toward her father）。

この Oedipus complex との不完全な訣別又は断ち切り（breaking-down）は，児童の心理の不条理（disorder）——例えば，学校恐怖症，去勢不安，ノイローゼ，性的倒錯——を誘因するといわれる。

去勢不安を起すのは，親が復讐するのではないかということを恐れてであって，その為，自分の願望を抑圧する。そのため，Oedipus complex を断ち切れないでいるのである。しかし，性的衝動のエネルギー（リビドー）は，そのはけ口を求め，性器いじり，露出症となる。あるいは，子供同志で性的遊戯をする。しかし，それが同性の親と同一視（identification）をとり，男児ならば父親の力（power）や知性（intelligence）を摂取しようとする形態をとった時，スポーツにあこがれたり，勉強に力を入れたりして，Oedipus complex は，発展的解消して，潜在期が来る。女児でも，女らしい優しさを母から取り入れ，仲間集団で社会化されて解消する。従って，Oedipus complex は，子供の社会化・昇華（求知心・スポーツ愛好）のためのエネルギーと化すのである。

男根期（3～6才）に現われる Oedipus complex は，家庭養育期であるため，第一次愛対象として，一般に母親固着である。又，この期のリビドーの発現は，Freud のいう小児性欲論となっている。このエディプス期に固着した人は，男では母親固着，女では父親固着となり，第二次愛の対象として，その親に似た人を選ぶという。

VI. Jung の Electra Complex Theory

C. G. Jung は，ギリシア悲劇のヒロインである Electra の名を，Oedipus complex の女性的変数（feminine variant）として使った。娘が，父親との間に性的親密観を感じ，ある場合には性的関係を持とうとする願望であるとされる。

男児の場合は，Freud に従えば，genital phase（12～20才），又は，Oedipus phase（3～7才）の初期に，すなわち，phallic phase（3～5才男根期）の終ろうとするころから本当は始って，同性の親と競争し，異性の親を求めたり性愛を感じ，結婚しようと思い，同性の親の死を願う抑圧された願望となる。

女児の場合は，彼女の愛の第一次対象たる母の代りに，第二次的愛の対象たる父の方向へ向い，父の愛を得ようとして母と張りあう。

Electra complex は，父に向けられた愛の願望（love-desires）の無意識的な抑圧（repressing）によって，又は，母との同一視によって征服される。この complex が完全に征服されなければ，この phase(phallic phaseに）に退行（regression）を惹き起し，固着(fixation)する。又，ノイローゼ（neurotic disorder）・ヒステリー性不安（anxiety hysteria）・転換ヒステリー(conversion hysteria）を惹起する。所謂，その固着によって，未成熟な，依頼心の強い，弱い，子供っぽい女性ができ上るというのである。

ギリシア神話上のエレクトラの物語は次の様なものである。

エレクトラの母クリュタイムネーストラーは，情夫アイギストスと共に，父アガメムノーンを殺す。母は，アガメムノーンが，トロイ遠征に行っている間に，情夫を作ったのである。父は帰国後，殺された。そして，先夫の娘エレクトラは2人に虐待され，日夜，父の追憶にふけり，弟オレステースと共に復讐の機の熟するのを待ち，2人を殺すという筋である。この父を想いこがれ，母を殺すエレクトラを，Oedipus complex の feminine variant としてそれを Jung は Electra complex としたのである。

参 考 文 献

1. Sophocles, King Oedipus, Oedipus at Colonus, and Antigone. Note by Robert J. Milch. (Brooklyn College) 1965 (昭40) Cliff's Notes.
2. 高津春繁「ギリシア・ローマ神話辞典」岩波書店, 1960[1], 1972[8]. (昭47)
3. 村田数之亮「ギリシア」河出書房, 1968
4. 中村元「自己の探究 — 原始仏教の世界思想史的考察」中央公論, 1973・4 (昭48), pp. 325〜342.
5. 山内登美雄「ギリシア悲劇—その人間観と現代」NHKブックス, 1969[1]. 1970 (昭45)
6. 呉茂一・高津春繁・田中美知太郎・松平千秋編「ギリシア悲劇全集 第二巻」人文書院, 1960. (昭35)
7. 呉茂一「ギリシア神話 下巻」新潮社, 1956[1], 1969[27] (昭44)